

《個人研究》

宮古島狩俣のニーラーグ
——アーク主の伝承を中心に——

居 駒 永 幸

はじめに

宮古島の狩俣では、夏の粟プーズ（豊年祭）においてニーラーグという長い叙事歌がうたわれてきた（写真①）。一般には「祖神のニーリ」の名で知られているが、狩俣ではニーラーグ（ニーリアーグ）とか、単にニーリと呼んでいる。ニーリは海の彼方に坐す祖先神、アークは歌の意と解されている⁽¹⁾。これは狩俣のウブグフムトゥ（大城元）に所属する男のファーマー（氏子）が中心となつてうたうもので、村を創始した祖先神や村の繁栄に力のあった英雄的人物の系譜や事蹟、そしてその偉業を讃える壮大な叙事詩である。



① ニーラーグの歌唱（夏の粟プーズ）
奥の右からアーク主2人と前のアーク主。

村の創世神話から繁栄の歴史に至る、これほど大きな構想をもった歌は他に例がなく、狩俣の神女たちがうたうタービやフサなどの神歌とともに、現在の南島歌謡を代表するもっとも重要な口承文芸の一つと言ってよい。しかも、狩俣の社会とその祭祀においていまも生きて機能しているところが特に注目されるのであり、そのうたわれる音声と現場に接することによって歌謡というものの生態を知りうる貴重な事例となっているのである。

しかし、ニーラーグは歌唱を担当するアグ主に後継者がなく、1998年から中断している。昨年と今年と2年続けてうたわれていない。アグ主の経験者も現在3名しかいないという状況である。その調査と記録は、いまや緊急の課題と言えよう。そこで本論では、夏ブーズでのニーラーグの記録やアグ主と呼ばれる歌唱者への聞き取り調査を通して得た資料をもとに、ニーラーグのテキストとアグ主による伝承の実態について基礎的な研究成果を報告するものである。

1 ニーラーグのテキスト

ニーラーグ研究の嚆矢

狩俣のニーラーグを広く知らしめたのは、稲村賢敷氏の1957年『宮古島庶民史』および1962年『宮古島旧記並史歌集解』である。稲村氏は「狩俣うやがむのにーり」5編の解説や詞章の全文とその解釈を記した。そして、その5編は2〜3百年以上の時間を要して15世紀末までに段階的にできあがったこと、また宮古地方では15世紀から16世紀にかけてニーリからアヤグへと史歌の発達と変遷があったことを論じた。冬の「うやがむ祭」で神女たちによって「祖神のにーり」がうたわれるとする点に事実誤認があるものの、狩俣のニーラーグをすぐれた知見を加えて紹介した稲村氏の功績は多大である。狩俣のニーラーグ研究はここに始まり、その後詞章の採録も行われるようになった。それらのテキストを以下に整理しておこう。

稲村氏が記録した詞章は、前掲『宮古島旧記並史歌集解』に「部落の古老狩俣吉蔵氏が若い時から記おくしていた歌を採録したもの」とある。稲村氏が1962年以前のいつ聞き取りをしたのか不明であるが、「古老狩俣吉蔵氏」とあるから、狩俣吉蔵氏がアグ主を譲ってからのことで、1962年からそれほどさかのぼらない時期であろう。

外間・新里両氏による狩俣の神歌採集

1964年には、外間守善氏・新里幸昭氏が当時80歳の狩俣吉蔵氏から「狩俣祖神のニーリ」を採集している。1966年に琉球大学民俗研究クラブも狩俣吉蔵氏から「祖神ニーリ」を聞き、同年『沖縄民俗』12号に第4章（途中省略あり）まで収録している。また、外間氏は音声表記と口語訳を加えて1968年『宮古諸島学術調査報告（言語・文学編）』にその詞章を紹介し、1971年『日本庶民生活史料集成』第19巻〈南島歌謡〉にも収めた。

さらに外間・新里両氏は、1972年『宮古島の神歌』に「狩俣祖神のニーリ」を音声表記と口語訳付きで、ピャーシ・フサ・タービの冒頭に掲げ、これによって狩俣の神歌とニーラーグを含む宮古歌

宮古島狩俣のニーラーグ——アーク主の伝承を中心に——

謡の全貌が見渡せるようになった。さらに1978年『南島歌謡大成Ⅲ宮古編』にも収録し、宮古の歌謡そして南島歌謡の全体において飛躍的に比較研究が可能になった。『南島歌謡大成』全5巻の完成は狩俣のニーラーグ研究にとっても、画期的な意味をもったのである。以上『宮古島旧記並史歌集解』と『南島歌謡大成Ⅲ宮古編』に代表される本文は、すべて狩俣吉蔵氏から採録された詞章であるから、これらを狩俣吉蔵テキストと位置づけることができる。

『南島歌謡大成』以後のテキスト

『南島歌謡大成Ⅲ宮古編』が出た翌年の1979年、池宮正治「宮古狩俣のニーリ——五〇年前のノート——」（『沖縄地方の民間文芸〈総合研究〉1』）は、鎌倉芳太郎氏が1922（大正11）年に狩俣調査の際に入手したニーラーグのノートを発見し、解説を付して紹介した。本文は、アーク主に選ばれた狩俣新茂が、1920（大正9）年に前任のアーク主久貝戸助の伝承する詞章を筆記したものだという。そのノートは本文を7編に分け、漢字に片仮名と平仮名を交えて詞章を書き取っている。私たちは池宮氏の報告によって大正時代の詞章を見ることができると同時に、備忘のノートが早くからあったことを知り得たのである。

その後、1987年『平良市史』第7巻資料編5（民俗・歌謡）には、平良新亮氏が1980年の夏ブーズの際にアーク主の狩俣昌喜氏（大正13年生まれ）から採集した詞章が収められた。昌喜氏は中断する1997年まで前のアーク主として指導的な役割を果たしてきた人である。

これまで取り上げたものはすべて文献に記載されたニーラーグの詞章であるが、1997年までアーク主を務めた平良昌清氏（昭和11年生まれ）の録音テープが私の手元にある。昌清氏はアーク主を15年間務め、一昨年までニーラーグをうたい続けてきた人である。従って、昌清氏がうたったものはニーラーグのもっとも新しいテキストということになる。

以上、私が知り得たニーラーグは、大正時代の久貝戸助、昭和30年代の狩俣吉蔵、昭和50年代の狩俣昌喜、そして最近の平良昌清の四名の方による、それぞれ時代の異なる4種類のテキストである。これらはニーラーグがどのように伝承されてきたかを知るための有力な比較資料と言えよう。

2 テキストの異同

祖神と英雄の一大叙事詩

ニーラーグはその内容から5章に分けられる。第1章は、狩俣の始祖神の系譜がうたわれる。天の赤星太陽の子真主——太陽の大按司豊見親——山のフシラズ——真屋のマツメガと続く系譜である。言葉を少しずつずらしていく対句仕立ての詞章を、両手を開いて左右に振りながら、ゆっくりと荘重にうたい出す。第2章は、大城真玉が生んだ二男五女の系譜。マバルマ（女）、真山戸（男）、世勝り（男）、シシミガ（女）、マカナシ（女）、マバラジ（女）と続き、最後に手が器用な真津真良（女）の誕生で終わる。第3章では、織物の名手真津真良の名が琉球王にまで聞こえるほど、村が繁栄する。軍勢がその富を奪おうと押し寄せて来た時、真津真良の甥の真屋のマブコイが激しい戦闘の

末、撃退する。英雄的な活躍をする真屋のマブコイを讃えて終わる。第4章では、大城殿という男酋の時代になり、パルマヤーの甥に井戸を掘らせ、大城の家にお神酒を持ち寄って三夜にわたって盛大にお祝いをする。戦闘を機に女酋から男酋に交替し、鉄製工具を使った土木事業によって繁栄していく様がうたわれる。歌の調子が途中で変わる。第5章は、大城真玉の次男の世勝りが、バギンミに屋敷を構え、その力が仲宗根豊見親に認められて造船や貿易を盛んに推進し、世勝りの名声は琉球国王にまで聞こえたことをうたう。この章がもっとも長く、途中でうたい方が変わる。

このように第1章と第2章の神から人への系譜、第3章の女酋から男酋へ替わる時の英雄の出現、さらに第4章と第5章の社会的事業の推進から狩侯の繁栄に至る、まさに「一大叙事詩」と呼ぶにふさわしい史歌と言えよう。

テキスト3種の異同状況

前掲4種のテキストは、以上の内容を一様に伝えていて相違するところがない。狩侯昌喜氏などアーク主の経験者たちによれば、その詞章は一言一句誤りなく厳格に伝えるべきものだったという。それでは、テキストの間に少しの異同もないのであろうか。そこで、『平良市史』の狩侯昌喜テキスト（〈市〉と略称、以下同じ）を底本とし、『南島歌謡大成Ⅲ宮古編』の狩侯吉蔵テキスト（〈大〉）と平良昌清テキスト（〈平〉）でその異同箇所を示してみよう。平良昌清テキストについては、1990年、1992年、1995年、1996年の4回の録音のうち、ここでは1990年のテープを採用した。また、『平良市史』の本文で、第4章の行を示す番号の34が抜けているが、これは単なるミスプリントと見て通し番号に直した。

第1章

- | | |
|----------------|------------------|
| ①11トヨントーリ ウラマゼ | いつまでも響動んで おられませ |
| ミャガストーリ ウラマゼ | いつまでも名揚げられておられませ |
| 12ユムトゥヌ ウプカン | 四元の 大神 |
| ユイビマス ウプカン | 四イビマの カミヤロズ〈神名〉 |
| 13トゥユン ウプグスクン | 響動む 大城に |
| ヤグミ サトゥンナカン | 恐れ多い 里の中に |
| (中略) | |
| 20トヨントーリ ウラマゼ | いつまでも響動んで おられませ |
| ミャガストーリ ウラマゼ | いつまでも名揚げられておられませ |
- 〈大〉 11～20の20行なし

- ②〈平〉 16の後、15の2行を繰り返す

第3章

- | | |
|-------------|-------------------|
| ③13ニスマガミ | (根島ニスマ) まで |
| シラスガミ トゥユタレ | シラス(ニーラ) まで とよまれよ |
| 14ウキナガミ | 沖縄まで |

宮古島狩俣のニーラーク——アーク主の伝承を中心に——

ウマイガミ トゥユタレ 御前（王）まで とよまれよ

〈平〉13の2行と14の2行を入れ替える

第4章

④11イカラソディ ヤラビ 「髪を洗うのだよ、童、

テソミソディ アティナ 手を洗うのだよ、子ども」

〈平〉一行目「イカラソディ」と2行目「テソミソディ」を入れ替える

⑤49マストゥリャバ サマエ マストゥ（枅取）リヤ（祭費の割当）をなされ

〈平〉「ズガ トラバ サマエ マス トラバ サマエ」

〈大〉「ジかどうりゃば さまえ まシとぅりゃば さまえ」

第5章

⑥21ヌストゥンナ ツンテ 布をたくさん 積んで

カシトンナ ツンテ 紐（糸）をたくさん 積んで

〈大〉21の2行の後、「ぎらいわしからや シたていわしがらや」あり

⑦24スクマニス ナウレ 風は北風に 変り

〈大〉「シくなばい ばいや」

⑧32パイスマス ウヤウヤ 南島（八重山）の 親親は

パスギス タヌ トノトノ 南桁（八重山）の 殿殿は

〈大〉32の2行なし

⑨42フナバラヌ ンティキヤー （それなら）船腹に 満ちるまで

フナキドゥヌ ンティキヤー 船舷に 満ちるまで

〈大〉42の2行なし

⑩62スタティワーシ ウリバ （船の）仕立ても すんで

ウスティワーシ ウリバ 追し手（出船）の支度も すんで

〈大〉「シたていわしがらや うシていわしがらや」

⑪65カジマチ ウリバ 風を待って いると

ウスティマチ ウリバ 押し手（追風）を待っていると

〈平〉65の前、「ツミヤギ ワーシ カラヨ ギョライ ワーシ カラヨ」あり

⑫76の2行目クミファダキ ウムイ 自分の宿した子どもほどに 思い

〈大〉「くみふあだき さまい」

⑬87ストギス デャーン スティガラ 祈りを 捧げ 終ると

ヨース デャーン スティガラ 祝福を 捧げ 終ると

〈平〉〈大〉とも87の2行なし

⑭92カジマチ ウリバ 風を 待って いると

ウスティ マチ ウリバ 追っ手の風を 待って いると

〈平〉92の後、「ユカラディ ヤリバ ンカラディ ヤリバ」, 〈大〉同じく「ゆからでい やりば

んさらでい やりば」あり

⑬93スクマニス ナウレ スクマニス（季節風の西風）が直って

〈大〉「すくなばい ばいや」

⑬05カスマタヌ ウヤヨ 狩俣の 親よ

トヨシ ヨマサスヨ とよむ ユマサスよ

（中略）

09アンシ ウリ ミュリバ あのようにして 参られたので

カンシ ウリ ミュリバ このようにして 参られたので

〈大〉05～09の10行なし

⑬11ウシュウヌ ウイカラ 御主（首里王）の 御下賜品を

ポーヌ ウイカラ 坊（首里王）の 御下贈品を

〈大〉11の2行なし

ニーラーグの詞章に関しては、正確に伝えることが厳格に守られていると思っていたので、これほどの異同があることにはいささか驚きを禁じ得ない。これによってニーラーグの詞章が一つでないことが分かる。いや逆に、2時間以上も何も見ないでうたわれるのに、これだけしか異同がないと見ることもできる。それは伝承者たちが詞章の正確な継承のために注いだ並々ならぬ努力に他ならない。生きて機能している口頭伝承は常に逸脱と脱落をはらんでいる。ニーラーグにとっても異同は避けられない。それが口頭伝承の生態というものだろう。

異同の整理と傾向

次に異同のあり方を整理して示してみよう。

A 対句・対語が入れ替わったもの——③④

B 一語をうたい替えたもの——⑦⑩⑫⑮

C 対句が1行ないし2行脱落したもの

(1) 〈平〉〈大〉にあって〈市〉にないもの——⑤⑭

(2) 〈市〉〈平〉にあって〈大〉にないもの——⑧⑨⑰

(3) 〈市〉にだけあるもの——⑬

(4) 〈平〉にだけあるもの——②⑪

(5) 〈大〉にだけあるもの——⑥

D 10行以上にわたって脱落したもの——①⑯

ニーラーグの詞章は対句・対語やくり返しによってうたわれる。狩俣では対句を「ふた声」と呼んで日常語と異なる神歌の言葉と理解され^②、「神の言葉は必ずふた声になる」（ユースヌスをつとめる久貝マツさんの談）と言われている。しかし、対句やくり返しは類似の言葉ゆえに紛らわしい言葉となって、アーグ主の口元をつい狂わせてしまうことがあろう。A～Cの異同は多かれ少なかれそのような対句・くり返しの紛らわしさに関係していると見られる。

異同という伝承の生態

明らかな例としては、(1)―⑤⑬である。これは〈平〉〈大〉も対句になっているのに、〈市〉では片方だけしかうたわれなかったということであろう。1999年8月、狩俣昌喜氏がノートを見ながらニーラーグをうたった時、両方ともここはきちんと対句になっていた。この部分は類似の対句が2回くり返される部分で、唱謡される時に一方が落ちてしまうことは十分あり得るのである。平良昌清氏の場合の対句を入れ替えてうたったAの③④も同様の事情と考えられる。それらはうたわれる歌謡の宿命的な現象である。

しかし、Bの⑦⑩⑫⑮、Cの(2)―⑧⑨⑬、(5)―⑥の場合は、〈市〉〈平〉と〈大〉との明らかな相違を示す異同である。Bの場合は、⑦⑬のようにある傾向をもった異同と見られるが、Cには単に脱落では説明できないテキストの独自性のようなものが表れている。ここには狩俣吉蔵テキストからそれ以後のテキストへの継承の問題が含まれているのかもしれない。

もちろん、5年、6年と唱謡している間に、本来ないはずの独自の詞章がアーク主によってもたらされることもあり得る。Bの(3)―⑬や(4)―②⑪は、その代のアーク主に関わる異同の可能性はある。平良昌清氏は、自分がアーク主の時に前にはうたわなかった句を入れてうたったと教えてくれた。そして、前のアーク主であった狩俣昌喜氏からも、そのことは平良氏から相談されて了解していると聞いた。それはおそらく(4)―⑪であろう。②は直前の対句がついくり返されたものと考えられるが、⑪には確かな根拠がある。この後の91と92に同じ形が出てくるので、それと合わせるために91と同句を入れたと見てよい。この方がはるかにうたいやすい。しかしそれは、あくまでうたい方の小さい範囲にとどまっている。

狩俣吉蔵テキストの独自性

ところが、Dの①⑮は〈市〉〈平〉と〈大〉の間の大きな相違を示している。①は〈大〉になかった「四元の神」を新たに立ててその神威を讃えるものである。「四元の神」とは、ウヅグフムトゥ（大城元）のアサティダ・ウマティダ、ナーマムトゥ（仲間元）のマーンツザーリュウグヌス・パマヌサトゥヌス、シダティムトゥ（志立元）のユースヌス、ナーンミムトゥ（仲嶺元）のミズヌヌスのことで、狩俣を代表する神々である¹³。しかし祖神の系譜から見れば、前半の20行で完結しており、「四元の神」だけを取り上げる後半部は明らかにつながりがよくない。1の始祖神から2の大城元の祖先へと続くうたい方としては、〈大〉の方がふさわしい。それにもかかわらず、「四元の神」の後半部20行が〈市〉〈平〉に存在するのは、狩俣での「四元の神」の優位性によるものであろう。この「四元の神」は、狩俣の最高位の神女アブヌマがよむ主要なタービ「根口声」「祓い声」「ヤーキャー声」に必ず出てくる。大城元の神を頂点とする「四元の神」は狩俣の神の総称とも言えよう。13「響動む大城」の「四元の神」は、第2章の大城の神の子孫、大城真玉につながっていくと考えると、「四元の神」の第1章後半部はやはりうたわれるべき根拠があったことになる。大正年間の久貝戸助テキストにもこの後半部はあった。

次の⑮はどうであろうか。⑮の10行は世勝りが首里王に貢物を献上して品物が下賜される場面で

ある。世勝りの功績が首里王によって讃えられる部分で、世勝りの名はここでもくり返されるべきものであったのだろう。果して⑩の10行は久貝戸助テキストにもあった。

ニーラーグ伝承の生態と力学

以上のように、全体として見れば、A～Cの異同はアーク主がニーラーグを厳格に受け継いできたという範囲内のものであるが、その一方でDのようなアーク主の理解と判断に関わる異同としか見られないものをも伴っていた。それは、関根賢司氏が「異本」の関係を示唆したように⁽⁴⁾、テキストの独自性を成立させる要因をはらんでいた。Dの異同で言えば、狩俣昌喜・平良昌清テキストは狩俣吉蔵テキストよりも久貝戸助テキストに近い。この関係から見ると、狩俣吉蔵テキストには独自性があった。アーク主はニーラーグの厳格な伝承者であると同時に、権威ある管理者でもあったと言えるのではないか。しかし、それは継承されず、以前の伝承に戻った。そこには口頭伝承の流動性とはまた別の、伝承への方向づけ、言わば伝承の力学のようなものが働いていると思われる。

ニーラーグは2人のアーク主が先唱し、その後を大城元の55歳以上の男性氏子20～30人が唱和する。1991年から7年間は後任がいなくて平良昌清氏が一人でつとめたが、本来は2人制なのである。夏ブーズでは前のアーク主も隣りに立つ。アーク主の2人制も、前のアーク主の同席も、気が遠くなるほど長い歌を厳格に伝承していくための、どうしても必要な制度だったに違いない。それと同時に、ニーラーグが伝承の間に逸脱したり、変容したりすることへの歯止めでもあったであろう。この異同にこそ、ニーラーグの伝承の生態と力学が映し出されていると言える。

3 アーク主の伝承

1999年8月と9月、前出の狩俣昌喜、平良昌清の両氏と大浦貞雄氏（昭和2年生まれ）の3人のアーク主経験者に話を聞くことができた。以下、狩俣昌喜氏への聞き書きを中心に、2人の話を参考にしながら、アーク主によるニーラーグの伝承について記述しておきたい。

アーク主の選任

大城元の氏子は約55人いて、男の神役組織はピュース主（口取り主）1人、アーク主2人、サズ（佐事）2人、ポーザ（補佐）2人で構成される。この中でピュース主とアーク主には厳格な選任方法があるという。

アーク主、ピュース主を選ぶ場合に、大城元と志立元の二箇所からしか選ばないんですよ。狩俣の生まれなのに、そんなに区別をつけたかなと。当時は祭りの人はえらいと考えていたはずだからね、なかなか出せないんだよ。

昌喜氏はこの二役に相当の権威があったという。その資格者は大城元と志立元に限定されてきた。なぜ志立元の氏子も対象となったのかは分からないが、実際に志立元の大浦氏が選ばれている。

旧暦の2月に、2月マーイといって、ユタの前に行って、4組か5組ぐらい持って行って教わっ

宮古島狩俣のニーラグ——アグ主の伝承を中心に——

てくる。2人組のよ。帰ってきて大城元に報告に行ってから、それを紙に書いてさ、何年生まれ、子年とか丑年とか、ユタの言葉を頂戴してきて、それをみんなまとめて、ユタに子年がいいと言われたら、言われたムヌスーが3~4名いたら、それを一番先頭に書く、次はまた次のものを書く。今度はそれをひねってお膳に載せて、この世の上座は右の方で、あの世の上座は左の方だから、大城元で神様に向かって振る。それが左に落ちるのが一番くじ、右の方のは違う。右の方のはやり直し。左の方に三回落ちたらそれが選ばれるんだ。一番くじと二番くじを出してもらうのさ。一番くじの人が断ったら、二番くじの人にくるんだよね。それでも出ない場合は今みたいにいないわけさ。昔とは全然違う。お願所、元に対する関心が薄くなっている。

アグ主の選任は、大城元の神様の前で神くじで行われる。これはウヤーン（神女）の場合も同じである。その前にユタ（カンカカリヤとも言い、神の託宣をする人）にも判事をもらう。くじの紙がなぜ左に落ちるのがよいのか分からなかったが、あの世の上座が左だからという説明である。アグ主とピューヌ主は神の世界に属するということであろう。ユタの託宣を経て大城元の神様に選ばれたという形をとると、それは対応している。しかし、1991年からはアグ主が一人になり、現在はアグ主もピューヌ主も不在である。

アグ主の継承

アグ主は2人制である。2人同時に交替することを避けているから、先輩と後輩の関係でニーラグの歌唱が伝承されていく。

アグ主とピューヌ主を両方やることはない。おじいの座敷の頭はピューヌ主だ。ウトド主の隣に前のスザ主が立つ。なぜかという、二人が手間取ったとき、応援してあげる責任があるから。

先輩をスザ（兄）主、後輩をウトド（弟）主といい、その隣りに前のスザ主が立って、歌詞が出てこない時には教えてあげるという。私は夏ブーズで何度かこのような場面を見たことがある。昌喜氏は前任者からニーラグを教わって、8年間アグ主をつとめたという。

私のアグ主の時には新里新公といって、先輩が2ヶ年一緒につとめたからね。新里さんが休まれたんだ。後は久貝吉雄といって、その人と一緒に6~7年務めた。僕が上役になって、久貝さんに出てもらったから。

6年以上あんたがやったら、抜けますよと言った。まだ2年だから、6年以上はつとめようなど約束して、出てもらったよ。僕は8年で休んだんだけど、僕の後には大浦貞雄という人に出てもらった。久貝さんの後任には平良さんに出てもらったからね。

2人のアグ主はそれぞれ継承する先輩が違うというわけである。それを整理してみると次のようになる。

……狩俣金吉（8年）→狩俣昌喜（8年）→大浦貞雄（12年、1990年まで）

……………新里新公（不明）→久貝吉雄（7年）→平良昌清（15年、1997年まで）

アグ主は誰でもいいということではないようだ。ウヤーンが先祖代々ウヤーンを出すニーヌヤー

から選ばれる（昌喜氏の談）のと同じように、アーク主にも選ばれる家柄があるように見える。例えば、狩俣金吉氏は吉蔵氏のむこ、平良昌清氏も父親がアーク主であった。大浦氏の場合はブカマヤーと呼ばれるムトゥヤーであり⁶⁾、ニーラーグに出てくる世勝りの屋敷跡、パギンミユマサイに接して家がある（地図参照）。アーク主に選ばれる人は家柄からある程度予感があるという。

夢とノート

アーク主に選ばれると、447行（『平良市史』のテキスト）のニーラーグを覚えなければならない。その重圧は大変なものだと3人とも口をそろえて語った。平良氏の場合は手帳のような小型のノートに書いて、毎朝家族が起きる前に誰もいないところで覚えたという。その努力は並ひと通りでない。昌喜氏もノートを持っている。

これは写しただけさ。先輩のを見て書いた。アーク主はみんな持っている。ビャーシのおじいなんかは小さい紙に書いている。ビャーシは長くないさね。

昔はね、先輩の方が言うのを耳にして覚えたさね。四斗瓶の味噌を持って通った。なんで味噌を持って行ったかという、味噌がお茶のおかずでね。今で言うたら茶菓子、お酒のつまみにもなる。その二りを習うために、四斗瓶の味噌がなくなるまで通ったという話もある。それが、そうはいかないというて、昭和の初め頃かな、前里太郎という人がノートに書いた。一番最初にノートに書いた。それからみんなノートに写すようになって、よんでいるさね。

ノートはすべて片仮名で書かれている。平良氏は前任の久貝氏のノートを書して教わったが、最初はまったく意味が分からず、音だけで覚えたという。昌喜氏はやはり前任の金吉氏のノートを書した。四斗瓶の味噌の話は、ニーラーグを覚えるのにどれだけ時間がかかったかを象徴的に表すものとしておもしろい。ノートの起源は昭和の初め頃の前里太郎と、その名前まではっきりと理解されている。昌喜氏の祖父の世代からの明確な伝承なのであろう。大正年間に狩俣新茂ノートがすでにあったことは知られていない。

ウタキのことを漏らしてはいけないという怖さがあったわけさ。それで先輩の方から聞かされなかったよ。それでムトゥのまわりのことだって、漏らしたことがなかったんだ。

昌喜氏は4,5年つとめた頃から余裕が出てきて、ニーラーグの意味を少しずつ理解するようになったが、そこに出てくる神やその内容について、先輩から教えてもらったことはないという。それは、狩俣の神がヤグミカンすなわち恐れ多い神という神観念からくるものである。

昌喜氏はアーク主に選ばれる前に夢を見たという。

46歳ではじめてアーク主になる時、あやしい夢を見たよ。そんなに詳しくは見なかったけどね。アーク主になることは全然知らなかったけれど、帳面をもらう夢を見た。それは今思うと、先輩からあんたが受けなさいという夢だったんだな。

また、交替する前年の夢についても、次のように語っている。

マヤノマツメガの家の方にとことこ歩いていったら、上の方に若い娘がいて、あんたはここに行け、あそこに行けというもんだから、「はい」って行ったら、マヤーのね、髭を生やしたおじい

宮古島狩俣のニーラーグ——アーク主の伝承を中心に——

が、お前のノートを読みなさい、という。それが8年目の時、明けて9年目はズズバタス（次に渡す）だった。読む時、お酒と塩を持って行ってズズバタスをするんだよ。そのおじいの言うことにはよ、あんたの家からトゥラスパーに行けと。夢だよ。トゥラスパーというのは東の方なんだよ。これが僕の後任、大浦貞雄なんだよ。後任に譲る時は夢さ。夢もほんとに当たるもんだな。

おばあさんたちがウァーンになる時に夢を見ることはよく知られており、私もユースヌスの久貝マツさんから夢の話聞いたことがある。昌喜氏の夢はアーク主もウァーンと同様、狩俣の神に仕える位置にあることを示している。「帳面をもらう夢」では、アーク主の選任がノートの継承で象徴されている。それはアーク主を辞める時の、ノートを読むという夢につながっている。辞める時の夢に見たマヤノマツメガは、ニーラーグの第1章に山のフシライの子で狩俣の祖神としてうたわれ⁶⁾、その屋敷跡の大山家にイビ（拝所）がある（地図参照）。「髭を生やしたおじい」はアーク主の祖先のニーリの神と見てよい。アーク主を退任するのも、ニーラーグに出てくる神の夢を見て、神に辞めるのを許されるという形をとるのである。

このように、アーク主はノートの存在によって象徴される。その背景に、新任のアーク主が先輩のノートを書き写すことでニーラーグを厳格に伝承してきたという、ノートの継承があったことは間違いない。口頭伝承のはずのニーラーグの継承が逆にノートに象徴されるところに、狩俣の伝承世界における文字の権威の優位性が見え隠れしているのである。

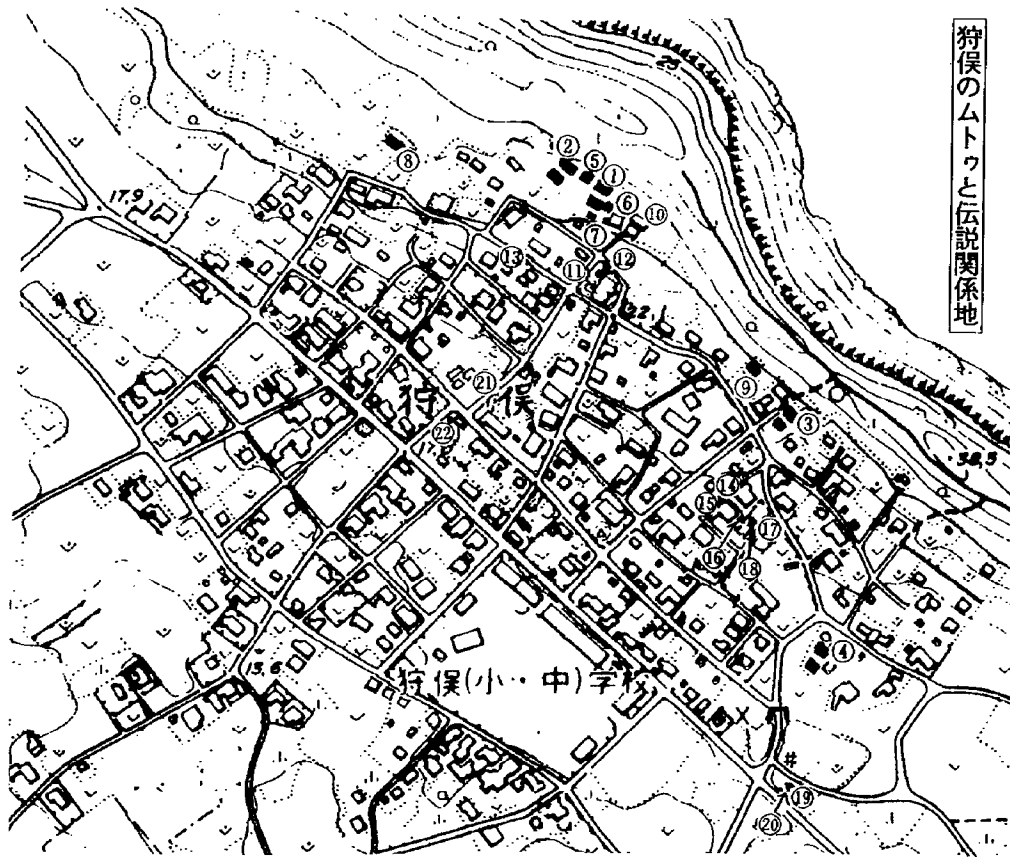
4 ニーラーグと里ウブナー

ニーラーグが里ウブナーでうたわれることはあまり知られていない。里ウブナーとは個人の家で行われる小さな共同体の祭りである。私などはその実態を、今年になって3人の前アーク主の話から知ったくらいである。しかし、ニーラーグが夏プーズ以外の里ウブナーでうたわれることには、かなり重要な根拠と背景があるように思われる。

里ウブナーの起源

昌喜氏によれば、ニーラーグは1年に4回うたったという。旧正月元日と15日、旧6月の夏プーズ、旧9月の里ウブナーである。また平良氏は旧正月15日、夏プーズ、里ウブナー、冬ニガズ（祖神祭）の最後の打ち上げの日の4回で、里ウブナー以外はすべて大城元の南の家でうたったという。里ウブナーとはそれぞれの里で旧暦9月20日に行う「節ますウブナー」のことで、その起源について昌喜氏は次のように伝承している。

唐から帰ってきたトウツクドン主は、旧2月の初めの午の日に、カタフツウブナーと言って、冬の祭りの役職者やウブグフムトゥの氏子のために、牛を一頭殺してお祝いしたそうだと。これは別のムトゥにはない。そうしたら、ナカヤシドゥというおじいがあんたにだけは負けたくないと言って、里ウブナーをつくったそうだと。



【ムトゥ】

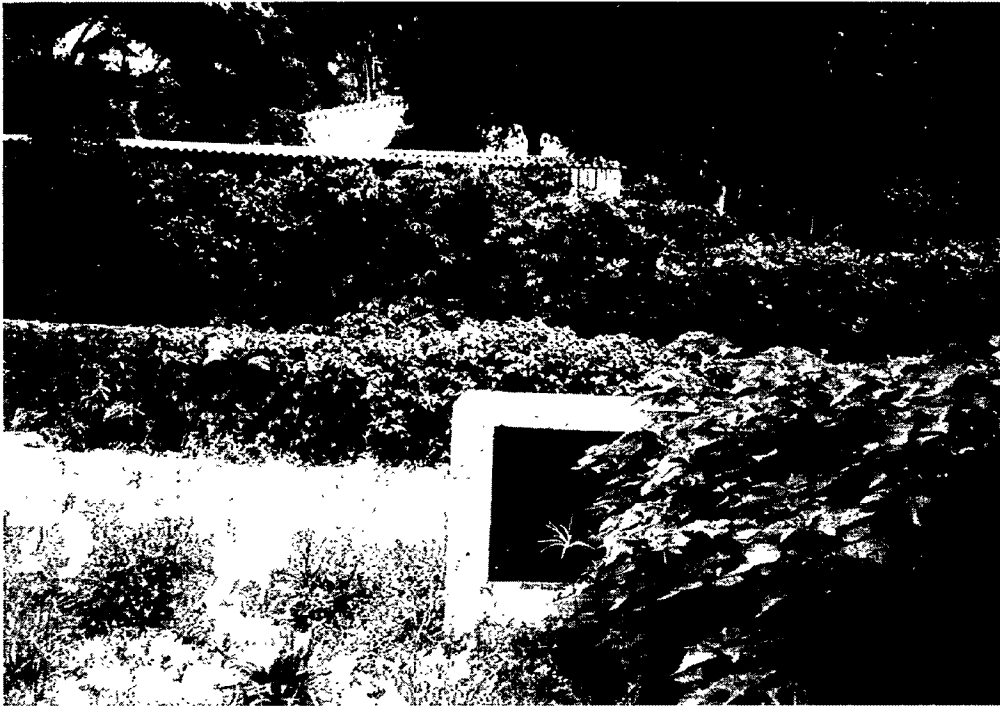
- ① ウブグフムトゥ
- ② ナーナムトゥ
- ③ シダティムトゥ
- ④ ナーミムトゥ
- ⑤ ニスヌヤームトゥ
- ⑥ マイニヤームトゥ
- ⑦ カニヤームトゥ
- ⑧ アラグフムトゥ
- ⑨ ザー

【伝説関係地】

- ⑩ ナカヤシドゥの屋敷跡
- ⑪ バルマヤー
- ⑫ ナカヤシドゥのイビ
- ⑬ マヤノマツメガのイビ
- ⑭ プカマヤー
- ⑮ ウーブヤー
- ⑯ ユマサンシュのイビ
- ⑰ バギンミユマサイ
- ⑱ ウヤンマミョーナズのイビ
- ⑲ ユマサンシュのウドゥス
- ⑳ バギンミノウプヤフツのイビ
- ㉑ ウプヤマ
- ㉒ マールウヤフズのイビ

トウツクドン主は子どもの時に中国に連れていかれ、妻帯して役人になったが、故郷忘じがたく狩俣に帰ってきたという伝説的人物。牛を殺して帰郷を祝ったという口碑が残っている⁽⁷⁾。トウツクドン主が始めたカタフツウプナーに対抗して里ウプナーを創始したナカヤシドゥは、アブノマがよむ「仲屋勢頭鳴響み親のタービ」にその名がある。素性も事蹟も不明であるが、「鳴響み親」とは祖先神、豊穰・豊年を賜われる神、神女の敬称に用いられるという⁽⁸⁾。2年前までアブノマをつとめた伊良部マツさんは、ナカヤシドゥは大城元の神の子孫で、自分の名を残すために里ウプナーをやった

宮古島符俣のニーラグ——アグ主の伝承を中心に——



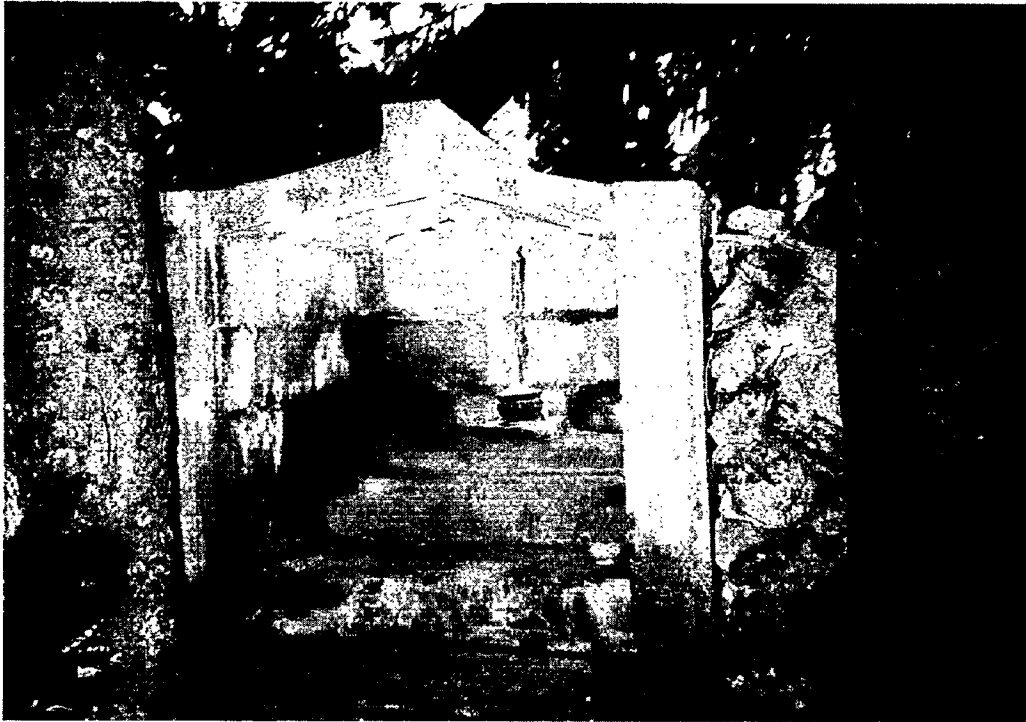
② 手前がパルマヤーとナカヤシドゥのイビ
奥の家がナーヤー

のだと説明してくれた。伊良部さんはユースヌスと交替で、里ウブナーの日にパルマヤーのナカヤシドゥのイビでニガリ（祈願）をしていたという（写真②）。

ナーヤーとウーブヤー

このような小共同体の祭りはかつては里ごとにあったと昌喜氏は記憶している。

昔は十何ヶ所の拝所でやったんだけど、今は消えてね、2, 3ヶ所しかないのかな。里ウブナーは旧9月だから、今10月にやっている。拝所はアーラグフ、カニヤー、マヤー、ナーヤー、スプヤー、ウーブヤー、マエヤデー、そういう拝所があった。隣組みたいな集まりなんだね。今は消えてないよ。今はウーブヤーしかないんじゃないかな。ナーヤーはどうなっているかな。アーラグフ、パルマヤー、そこのイビで、ナーヤーでニーリを一番つとめて、パルマヤーで二番つとめて、ウーブヤーで残り全部つとめた。ナカヤシドゥというおじいがトウツクドゥン主には負けないうて、ムトゥの偉い人たちを自分の家へお供して歌をうたわせたわけさ。アグ主に。それが由来でずっとやってきたんだけど、僕等の弟(ウトド主)まではやっていたはずだよ。ついこの前から止めているはずだ。これが里ウブナーだ。あそこの長男の年に合わせてやってるんだよ。兼村忠治先生が午の年だったから。里ウブナーは兼村先生の家でやられていた。そこが本家だったから。久貝、大浦さんまではやっていた。パルマヤーでナカヤシドゥが亡くなったもんだから、今は家がないけれども天幕を張ってつとめてきたんだけどね。それが自然に消えてし



③ ユマサンシュのイビ



④ 建物がウヤンマミョーナズのイビ
奥がパギンミユマサイ

宮古島狩俣のニーラグ——アグ主の伝承を中心に——

まって、今もうアグ主もいないから。

ニーラグがうたわれるのは、ナーヤーとウーブヤーでの里ウブナーにおいてである。ナーヤーは大城元のすぐ東にある兼村家のことで、ウーブヤーは志立元の南にあり、プカマヤーの大浦家とは隣り合わせの家で、現当主は平良恵長氏である。平良家の裏がパギンミユマサイと呼ぶ世勝りの屋敷跡で、平良家の敷地にユマサンシュ（世勝り）のイビが祀られている（写真③）。またその屋敷跡にもウヤンマミョーナズという世勝りの妻と伝えるイビがある（写真④）。ユマサンシュのウドヌ（屋敷跡）とイビは東門の近くの森にあるという伝えもある。

世勝りを祀る家とウイカヌス

里ウブナーでは1997年の10月20日までは平良昌清氏によってニーラグがうたわれていた。昌清氏の話では、午前中に兼村家でニーラグの前半第4章までうたい、夕方から平良恵長家で後半の第5章をうたったという。兼村家はナカヤシドゥすなわち大城元の神の子孫につながると考えられており（昌喜氏の談）、ニーラグの大城元に祀られる祖神の系譜を当家でうたう根拠は十分にあったと思われる。また後半の第5章は世勝りの活躍と狩俣の繁栄がうたわれるところで、その屋敷跡であり、その子孫とも伝えられる平良恵長家で歌唱されるのは、これも十分に根拠があることと言わねばならない。

昌喜氏がアグ主の時は少し違っていて、里ウブナーにおいてはまず、ニーラグの1番をナーヤーの兼村家でうたい、2番をパルマヤー、残りをウーブヤーでうたったという。パルマヤーは久貝主の屋敷跡と伝えている。

パルマヤーの久貝主といって、ニーリに出てくる。「クガイシュウガピヤスケ、ミョーニシュウガピヤスケ」といってね。仲宗根豊見親、フンナウの真主とニーリにあるから、その時代の人じゃないかね。

ただ、久貝主は世勝りのこととも考えられるから^⑨、パルマヤーはナカヤシドゥの屋敷の一部で、世勝りはそこで亡くなったとも解される。いずれにしても、パルマヤーはナカヤシドゥゆかりの地であり、ナカヤシドゥは大城元の神の有力な子孫であるとする、その場所でニーラグがうたわれる根拠は十分にあったことになる。

最後に、現在の世勝りのニガリに若干触れておきたい。砂川よし子さん（昭和12年生まれ）はユマサンシュ（世勝り）を学問、交通の神としてニガリをし、また大城元のウイカヌス（学問の主）もつとめている。ユマサンシュのウガン（願い）は毎月1日で、大城元、平良恵長家（ユマサンシュのイビ）、パギンミ（ウヤンマミョーナズのイビ）、ウブヤマ（マールウヤブズ）を廻ってニガリをするという。ユマサンシュは大城元の始祖神ウマティダの子で、マールウヤブズはその兄弟だと砂川さんは伝えている。ツズの神（役職をもらった神）もユマサンシュだという。世勝りのように、ニーラグの中の神や祖先は、女性神役によっていまも祀られ、その口碑が伝えられているのである。

結 び

宮古島狩俣の一大叙事詩というべきニーラークは、その構想と表現から見て、他に類例のないすぐれた口承文芸の一つであることは間違いない。本論では特に、ニーラークという叙事文芸を文学研究の側から論じていくための基礎的な報告と考察を行った。ニーラークの表現とその文芸性を分析するには、テキストやそれを取り巻く伝承、そしてアーク主という伝承者の存在など、狩俣の社会的民俗的な基盤や背景をおさえておくことが必要だと考えたからである。

本論では、考察の対象をニーラークの伝承世界を明らかにすることに限定したために、狩俣の他の神歌との関係についてはほとんど触れることができなかった。この点については、すでに外間守善氏が「タービ、ピヤーシ、フサや、神話、伝説などを下敷きにして次第に積み重ね」られたとし、特に「真津真良のフサ」がニーラークの第2章、第3章の中に再生産されていると指摘している⁽⁴⁾。そのようなタービ・ピヤーシ・フサを視野に入れたニーラークの生成論については今後の課題にしたいと思う。

注

- (1) 新里幸昭「宮古の文学」(『鑑賞日本古典文学・南島文学』1976年5月)
- (2) 内田順子「神歌と憑依—宮古島狩俣の神歌を対象に—」(『日本文学』1999年5月)
- (3) 本永 清「宮古島」『日本の神々・神社と聖地』13南西諸島, 1987年
- (4) 関根賢司「狩俣の神歌について」(『国文学解釈と鑑賞』1979年7月)
- (5) 『平良市史』第7巻資料編5(民俗・歌謡)
- (6) 山のフシライについては、上原孝三「女神“山のフシライ”をめぐる」(『沖縄文化』1990年9月)に詳しい考察がある。
- (7) 琉球大学民俗研究クラブ『沖縄民俗』12号, 1966年11月
- (8) 新里幸昭「狩俣の神々—タービ・ピヤーシをもとに—」(『沖縄文化研究』7) 1986年6月
- (9) 注(8)同論文
- (10) 「宮古の歌謡」(『南島歌謡大成Ⅲ宮古編』解説, 1978年)

(いこま・ながゆき 経営学部教授)